

## 第 41 回庭野平和賞 贈呈理由

米国「平和と正義のためのサラーム研究所」創立者、アメリカン大学 教授

モハメド・アブニマー博士

新たな千年紀を迎えて以降、世界には 55 を超える国家間の武力紛争が発生し、現在も二つの大きな戦争が継続している。世界にかつてなく陰鬱な時間が経過している今この時、庭野平和賞委員会を代表してその責務と栄誉を担い、ここに第 41 回庭野平和賞がモハメド・アブニマー博士に贈呈されることを発表する。

パレスチナ系アメリカ人の学者であり、平和活動家であるアブニマー博士は、平和と宗教間対話に向け、青年期からその半生を捧げてきた。現在、博士の祖国イスラエル／パレスチナを引き裂いている戦争が、同地域の歴史上最悪な戦争のひとつであること、そして博士の最初の著作が『イスラエルにおけるアラブ人とユダヤ人の紛争解決（仮邦題）』（1993 年）であることからも、平和の大義のために宗教協力に身を捧げる人々を表彰し激励することをその使命とする庭野平和賞委員会にとって、本年度の賞をアブニマー博士に贈呈することは、まさしく時宜を得たふさわしい決定であると確信する。アブニマー博士に関して特筆すべき点は、紛争解決と平和構築の実践を教育に結び付けた包括的な平和貢献にある。

アブニマー博士の教育は二種に分類される。ひとつは平和構築の学習に焦点を当てた学術的・理論的な教育であり、主にワシントン DC のアメリカン大学やその他の大学レベルの教育機関で行われている。もうひとつは、より実践的な教育であり、現実に起きている紛争の解決を目的とし、開発を紛争解決の手段に加えながら、博士自身が創設もしくは創設を支援した世界各地のさまざまな研究機関で行われている。米国の「平和と正義のためのサラーム研究所」、同じく米国のアメリカン大学「平和構築・開発研究所」、ノースカロライナ州グリーンズボロの「ギルフォード大学紛争解決・調停センター」、フィリピンの「ミンダナオ平和構築研究財団」などがその中に含まれる。アブニマー博士の平和への熱意はイスラームの信仰とスーフィーの教えに根ざしており、博士の活動のインスピレーションの源泉であるとともに、博士の家族の精神的基盤である宗教的価値観を反映している。博士の祖父とおじは 60 年以上にわたり、ムスリムと多数のキリスト教徒およびドゥルーズ教徒が共存するイスラエル北部ガリラヤの故郷の村で、ムスリムの指導者を務めていた。本年度の庭野平和賞受賞者であるアブニマー博士は、「魂を解放する」赦しと和解は信仰の根幹をなす価値観であり、イスラームはその価値観に基づき平和に向けて強固な枠組みを提供し得ることを常に確信してきた。「非暴力そのものが神学の一部であり、慈悲の概念はイスラームの基盤である。なぜなら慈悲は神の御名のひとつであるから」と博士は言う。1993 年以来、アブニマー博士はイスラームの原則である和解、赦し、非暴力の探究に多大な貢献を果たし、平和に対するイスラームの姿勢について、その神学的理解の促進に寄与してきた。

アブニマー博士の経歴は、博士がこれまでの歩みを通して公私を問わずマイノリティとしての立場にあったことを示している。それは、博士が 1962 年にガリラヤの地に生を受けたことに始

まり、1981年から1987年までエルサレムのヘブライ大学で学士ならびに修士課程を履修したこと、そして1993年に米国のジョージ・メイソン大学で博士号を取得したことからも知ることができる。しかし、博士は自らが置かれた状況を効果的かつ建設的に乗り越え、「頭、心、手、そして精神的なアイデンティティ」を結びつける包括的な方法論と変革へのビジョンによって、さまざまな民族的・宗教的背景を持つすべての男女の権利と尊厳を擁護してきた。

交渉者、調停者、平和構築者としての役割を通じ、博士はこれまで世界各地で紛争解決に携わってきた。博士の平和構築の旅は1982年、エルサレム近郊に「平和のオアシス」（ネーブ・シャローム）が創設された直後に始まる。対話促進のトレーニングでは参加者に対して、主にアラブ人とユダヤ人の若者の対話を可能にするための指導を行い、1990年代初頭からは北アイルランドのカトリックとプロテstant、スリランカの仏教徒とヒンドゥー教徒の関係改善に取り組んだ。スリランカの内戦時（1999～2007年）には、「ムスリム平和事務局」と「スリランカ平和構築・開発研究所」の設立に向けて支援と助言を行い、1999年から2005年にかけては、フィリピン・ミンダナオ島のさまざまなイスラーム分離主義グループの指導者およびミンダナオ和平プロセス事務局に対し、アドバイザーの一人として職務を担った。ちなみに分離主義グループの指導者と和平プロセス事務局は「ミンダナオ平和構築研究財団（MPI）」設立の際には共同の世話役を務めている。1993年から1999年にかけて、アラブ地域の市民社会と宗教組織を対象にNGO「サチ・フォー・コモン・グラウンド」のプログラムが実施された際は、紛争解決と平和構築に関する研修の大半を担当し、その一環として、1996年にはガザ地区で最初の紛争解決・コミュニティ調停センターの設立に寄与した。また、2015年に「イスラム国（IS）」がイラク北部に侵攻した際、博士はエルビルに赴き、若き宗教指導者たちに宗教間の理解を促進する方法について研修を行い、代表団を率いてイラクのラリッシュにあるヤジディ教最大の聖地とされる寺院を訪れている。

さらに、アブニマー博士はアフリカ大陸における平和と対話の促進にも取り組み、ダルフール（スーダン）、ニジェール、チャド、中央アフリカ共和国、ナイジェリアなどで紛争が続く中、宗教指導者と手を携え、宗教の名のもとに行われている暴力に対抗し、宗教間の分断の克服に向けて尽力した。2008年から2016年にかけては、「平和と正義のためのサラーム研究所」の活動を通じ、ニジェール、チャド、カメルーンのイスラーム宗教学校（マドラサ）の教師と生徒のトレーニングを目的とする大規模な取り組みを主導した。

アブニマー博士は、アメリカン大学国際学部（SIS）の教授ならびに平和構築・開発研究所所長の職務に加え、2023年9月にはSISのアブドゥル・アジズ・サイード国際平和・紛争解決学科の初代学科長に任命された。学者としてのキャリアに加え、博士は宗教間・文化間の対話に特化した初の政府間組織である「アブドゥッラー国王宗教・文化間対話のための国際センター（KAICIID）」の活動を通して、国際フェローシップ、諸宗教地域プラットフォーム、「ヨーロッパ・ユダヤ教徒・キリスト教徒・ムスリム協議会（MJLC）」など、数多くの宗教間プロジェクトを立ち上げ、その初期の活動を先導した。そして、KAICIIDの上級顧問を8年間務めたほか、NGO「ノンバイオレンス・インターナショナル（NVI）」の活動に、理事として過去28年間参加してきた。

最後に、アブニマー博士の幅広い著作について触れたい。博士は信仰に基づいた平和構築や宗

教協力による平和構築をテーマに 17 冊を超える書籍を執筆、編纂、もしくは共同編集している。主な著作に『イスラームにおける非暴力と平和構築：理論と実践（仮邦題）』（2003 年、5 カ国語に翻訳）、『宗教協力による平和構築と対話の評価（仮邦題）』（2021 年）、『多様性のなかの一致：中東における宗教間対話（仮邦題）』（2007 年）、『宗教間対話：ムスリムのための手引書（仮邦題）』（2007 年、4 カ国語に翻訳）などがある。また、学術誌『平和構築・開発ジャーナル（仮邦題）』の共同創刊者および共同編集者であるほか、『国際教育評論（仮邦題）』、『国際比較教育ジャーナル（仮邦題）』、『宗教倫理ジャーナル（仮邦題）』などの査読誌に多数の論文を寄稿している。以上のように、「宗教間対話による平和構築」の分野全域に対し、博士は顕著な貢献をしている。その多岐にわたる影響力の根底には、第一に草の根の人々、第二に教育機関を含む組織や機関、そして第三に政策レベルをもカバーし、重層的かつ効率的に活動に取り組む博士の能力がある。その傑出した功績を表彰し、第 41 回庭野平和賞をモハメド・アブニマー博士に贈呈することを、庭野平和賞委員会はその最上の喜びとする。

庭野平和賞委員会 委員長  
フラミニア・ジョヴァネッリ